

棚尾地区まちづくり事業
平成 29 年 1 月 26 日（木）19 時～
棚尾公民館 3 階

第 57 回 棚尾の歴史を語る会 次第

1 前回までのテーマに関する参考意見
棚尾の歩み など

2 テーマ：歴史散策 1 「レールパーク」
説明（磯貝国雄）
出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

4 次回日程

第 58 回棚尾の歴史を語る会 平成 29 年 3 月 23 日（木）午後 7 時から
テーマ：歴史散策 2 「毘沙門通り」

「碧南レールパーク」

1 要旨

《大浜口広場》

大正 3 年（1914）に、三河鉄道が刈谷新駅～大浜港駅（現在の碧南駅）間の営業を開始し、翌 4 年に大浜港駅から臨港線が延長され、海陸連絡の大浜口駅が開業した。

大浜口駅はレールパーク大浜口広場の位置であった。衣浦港に入港した大型船から小船に積み替えられた石炭などの貨物は、堀川を遡り、ここで鉄道に寄せ替え刈谷駅まで行き、東海道線に連結され全国へ輸送された。しかし、駅は昭和 21 年（1946）に役目を終え廃止された。

《玉津浦広場》

玉津浦海水浴場は内海や三谷などと並ぶ県内有数の海水浴場で、大正 4 年（1915）に開設され、昭和 39 年（1964）臨海埋立て工事開始によって 50 年間の幕を閉じた。

日本赤十字社愛知県支部は、この玉津浦海水浴場で虚弱児童の健康増進を図る目的で、永年にわたり児童保養事業を行った。県内各地から、親元を離れ不安と期待を抱き参加する児童と祈るような思いで見送る親が、この玉津浦駅に降り立った。

《棚尾広場》

三河線は貨物輸送を目的として営業を開始したため、どの駅も構内が広がっている。棚尾の駅からはサツマイモやニンジンなどの農産物や鋳物製品が出荷された。

《三河旭広場》

この辺りは、昔は海だったが慶長 10 年（1605）に矢作川が開削され、上流から大量の土砂が流れ込むようになり、湿地が出来た。これを利用して、稲生平七郎は寛文 3 年（1663）この地に平七新田を完成させ、現在の平七町、志貴崎町、川端町、雨池町などの土地ができた。

2 三河線（碧南～吉良吉田間）の沿革

明治 45 年（1912） 三河鉄道が設立され、刈谷新駅～大浜港駅間の起工式が行われる。

大正 2 年（1913） （呼称）蒲郡線（大浜港駅～蒲郡駅間）に鉄道敷設免許される。

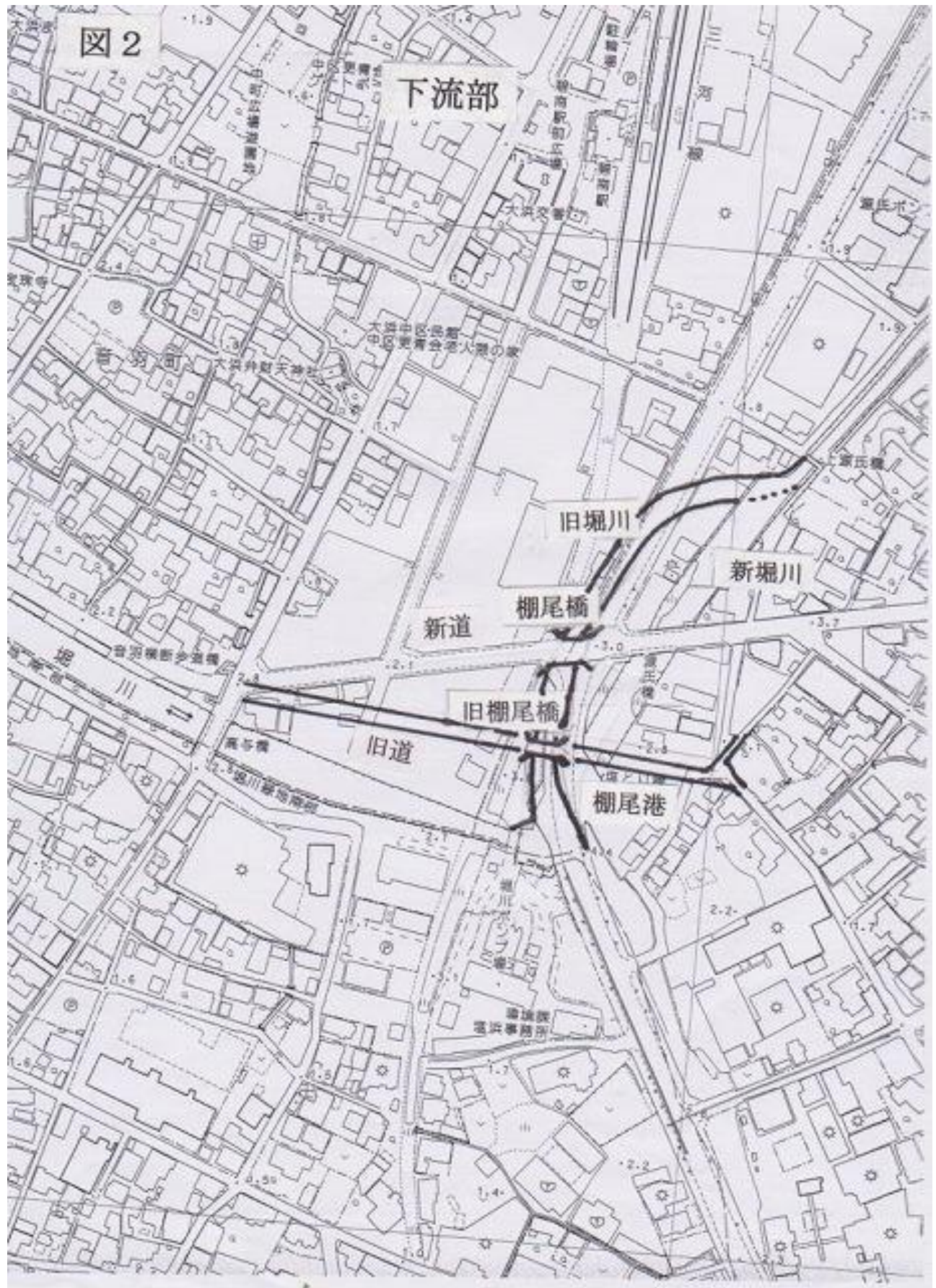
- 大正 3 年 (1914) 刈谷新駅～大浜港駅間が営業を開始。
- 大正 4 年 (1915) 大浜臨港線 (大浜港駅～大浜口駅) 開通。
- 大正 14 年 (1925) 蒲郡線の起工式を大浜尋常高等小学校で行う。
- 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日大浜港駅～神谷駅 (その後松木島駅) 間が開通する。
棚尾駅も開業する。
- 昭和 2 年 (1927) 棚尾駅の駅舎が竣工する。
- 昭和 3 年 (1928) 神谷駅～三河吉田駅間が開通する。
- 昭和 16 年 (1941) 三河鉄道が名古屋鉄道と合併し、名鉄三河線と改称する。
- 昭和 29 年 (1954) 大浜港駅を碧南駅と改称する。
- 昭和 40 年 (1965) 棚尾駅の貨物営業を廃止する。
- 昭和 41 年 (1966) 7 月 棚尾駅が無人化となる。
- 平成 2 年 (1990) 碧南駅～吉良吉田駅間はワンマン運転の L E 車が運行を開始する。
- 平成 16 年 (2004) 3 月碧南駅～吉良吉田駅間が廃止となる。
- 平成 23 年 (2011) 矢作川鉄橋の撤去が完了する。

3 大浜口広場

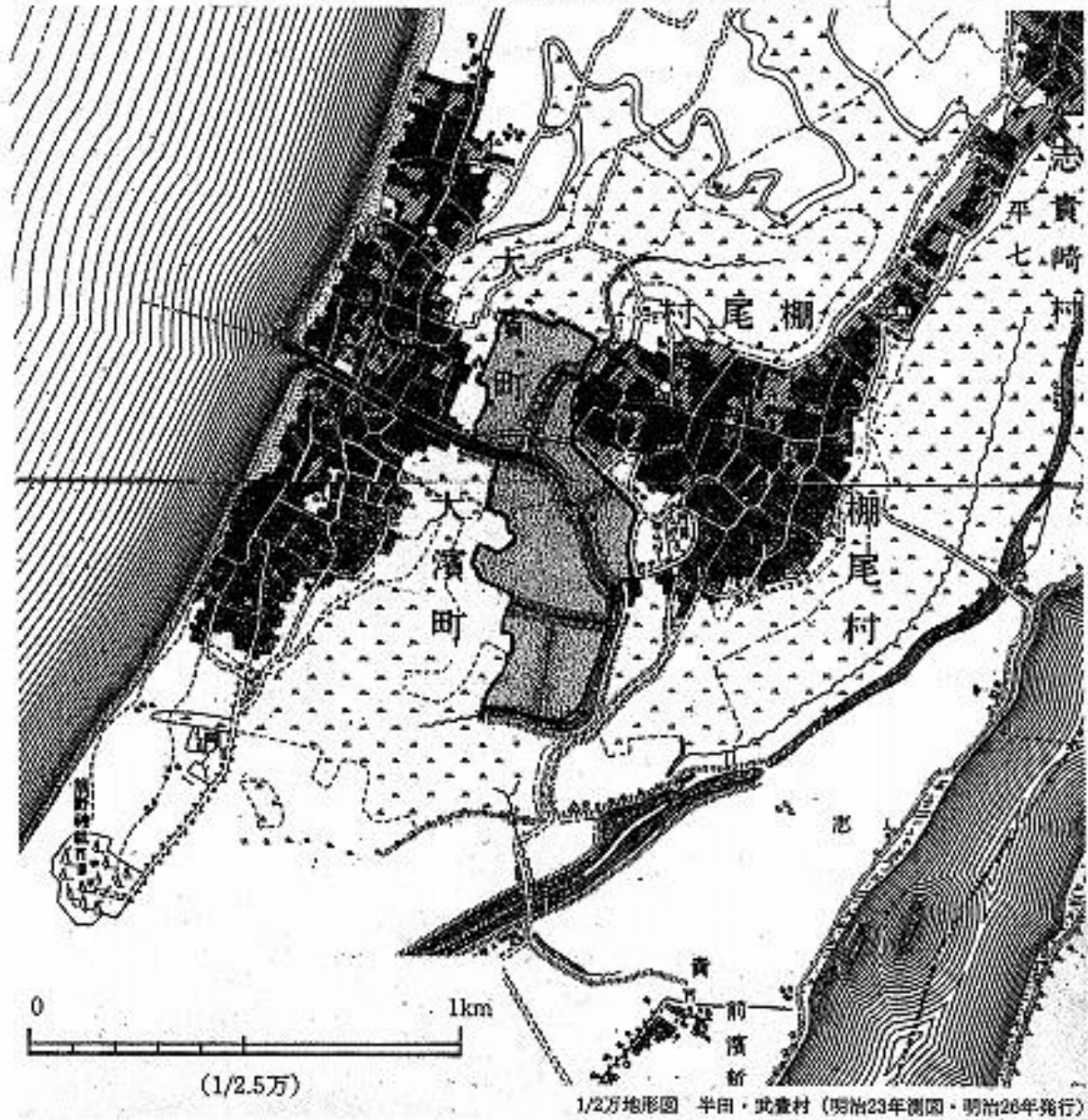
(1) 大浜臨港線

大正 3 年 (1914) に、名鉄三河線の前身である三河鉄道が刈谷新駅～大浜港駅 (現在の碧南駅) 間の営業を始めた。翌 4 年に大浜港駅から臨港線が延長され、海陸連絡の大浜口駅が開業した。

大浜口駅の位置は、レールパーク大浜口広場であった。衣浦港から堀川まで小船で運ばれた貨物は、ここで貨車に乗せ替え刈谷駅まで行き、東海道線に連結され全国へ輸送された。貨物の主なものは石炭であった。しかし、戦時中の貨物減少などにより、大浜口駅は終戦後の昭和 21 年に役目を終え廃止された。



最初の五万分図である明治23年測図にみる塩田の区域



(2) 塩田

大浜、棚尾には、江戸時代から明治末まで、堀川と堀川から南へ分流していた江川に沿って塩田があった。昔の塩の作り方は入浜式といって、砂を敷いた塩田に堀川、江川から海水を入れ、その海水を天日や風で乾燥させた後、塩のしみこんだ砂を掻き集め、その砂にさらに海水を通し、塩分の濃い塩水を作り、それを釜で煮詰め製品にした。

塩田があったのは、大浜地区では名鉄碧南駅東側一帯で、塩取場という地名があった。また、名鉄玉津浦駅一帯にもあった。棚尾では、源氏橋から南へ向って、現在の弥生町1丁目及び4丁目に塩田がひろがり、それぞれ源氏釜、西山釜、森下釜と呼ばれていた。藤井達吉もこの付近を「いつしかも 大浜道を あるき居りぬ 塩田なつかし 麦うれにけり」と詠っている。

この塩田の起源は文禄年間（1592 頃）に大浜村字竜宮から東の一浜まで溝を掘って海水を入れ、製塩を始めたといわれる。

寛永年間（1624 頃）に矢作川の氾濫によって埋没したが、同5年に大浜村の名主であった石川八郎右衛門は、領主本多下総守の許可を得て、今の堀川を改修して海水を引き入れて塩田を整理したので、再び盛んになった。ここの塩は、大浜塩と呼ばれ「塩の道」と言われる矢作川をさかのぼり、足助を通り信州に運んでいた。製塩業は農家の副業として産額も多かった。塩の品質はあら塩で、食用というより、魚類の塩づけ用に多く使われた。

しかし、この塩田も、明治38年には、専売が行われ、同43年（1910）には碧南での製塩が禁止された。その後は、太平洋戦争の激化とともに塩の需要が増えたため、玉津浦駅付近に碧海郡自給製塩場が設けられ、戦後の22年末まで続けられたが、廃業した。

(3) 棚尾港

この大浜口広場の位置は昔、棚尾港として栄えた。堀川は当初、この地の塩田に水を引くために開削されたが、同時に川港、排水路など多くの用途があった。瓦や酒などの運搬はこの棚尾港で小船に積まれ、大浜港の沖で大きな船に積み替え江戸など遠くの港へ運ばれた。

しかしながら、大正時代以降、貨物輸送における川港の役割りは次第に衰え、輸送の主力は鉄道に移り、さらに昭和になると自動車へと発展していった。

(4) 堀川ポンプ場

大浜口広場と接して堀川ポンプ場がある。このポンプ場は棚尾と大浜地区の雨水排水を行う。棚尾地区の排水区域は作塚町、春日町、栗山町、汐田町、源氏町、志貴町、弥生町である。排水された雨水は、堀川沿いの放水路を通過して大浜水門の西で放流している。

4 玉津浦広場

(1) 玉津浦臨港線

玉津浦駅から岬町2丁目の一つ橋排水ポンプ場まで、(通称)玉津浦臨港線が昭和10年(1935)に開通した。衣浦港に到着した石炭などの荷を小船で運搬し、蜷川を利用して一つ橋付近で陸揚げし、貨車で玉津浦駅に運搬するものである。ここからは三河線を経由して刈谷駅から東海道線で全国に輸送した。

この鉄道は大濱臨港線運送株式会社が経営し、社長は平岩鉄工所の平岩種治郎であった。

戦後はこの線路を利用し、名鉄が海水浴シーズンに電車を走らせ、観光客の利便を図った。この電車は「お伽の国電車」と呼ばれ碧南の観光に貢献した。当時の運賃は玉津浦駅～貨物駅(当時の駅名:「玉津浦海岸」)5円であった。しかし、昭和34年に伊勢湾台風に襲われた後、廃線になった。

(2) 玉津浦臨港線記念碑

この碑は、臨港線の建設功労者である渡邊秀治氏が昭和13年に亡くなられたのを悼み、大濱臨港線運送株式会社(社長平岩種治郎)がその功績を称え建立した顕彰碑である。

碑文は次のとおりである。

(表面)

故渡邊秀治君之碑

(裏面)

故渡邊秀治君千葉縣夷隅郡西畑村之人卒日本
大學法律科之業明治四十五年五月為三河鐵道
株式會社社員昭和二年十月累進支配人十年一
月退職君在社凡廿五年忠實應任拮据經營該社
之隆君之功居多會同社畫臨港線之建設十年八

月成矣先是君圖設立大濱臨港線運送株式會社
東奔西走十年七月克創焉爾來夙夜黽勉期其盛
大惜哉天不假壽昭和十三年一月廿一日遂以病
没享年五十有七茲建碑而傳其功於無窮矣

昭和十三年四月

大濱臨港線運送株式會社 社長 平岩種治郎
三河鐵道株式會社 専務取締役 平田重兵衛

(訳文)

故渡邊秀治君は千葉縣夷隅郡西畑村の人なり、日本大学法律科を卒業し、明治四十五年五月に三河鐵道株式會社の社員となる。

昭和二年十月支配人に進み、昭和十年一月に退職する。渡邊君は凡そ廿五年間会社に在籍し、任務に忠實で、経営にはくたくたになるほど働き、この会社の隆盛に貢献した。

同社の計画する臨港線の建設は昭和十年八月に完成した。渡邊君は、この大濱臨港線運送株式會社の設立を図り、十年七ヶ月の間、東奔西走し、朝早くから夜おそくまでよく勤めあげたので、遂に完成し、事業も大いに盛んである。

しかし惜しい哉、天は彼に命をあたえず、昭和十三年一月廿一日遂に病に以って没す、享年五十七歳

茲に碑を建て、其の功績の偉大なることを傳える。

昭和十三年四月

大濱臨港線運送株式會社 社長 平岩種治郎
三河鐵道株式會社 専務取締役 平田重兵衛

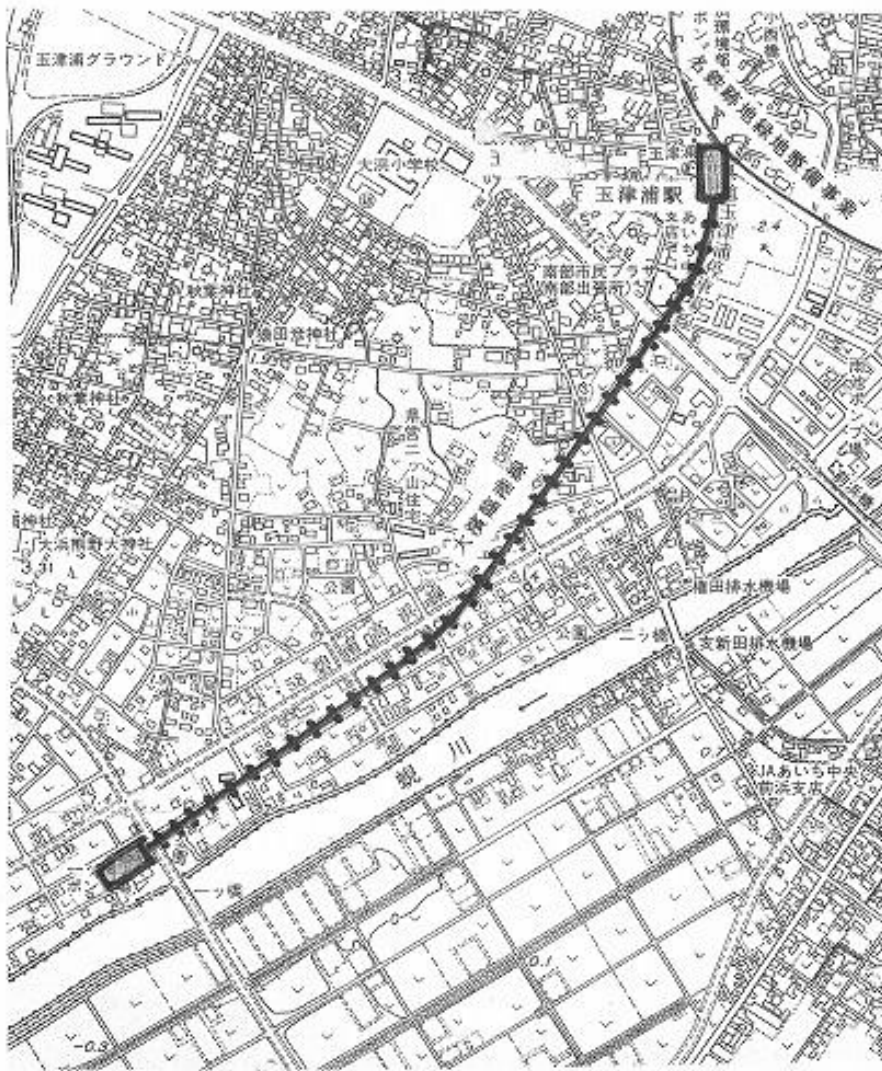
(3) 玉津浦海水浴場と赤十字玉津浦児童保養所

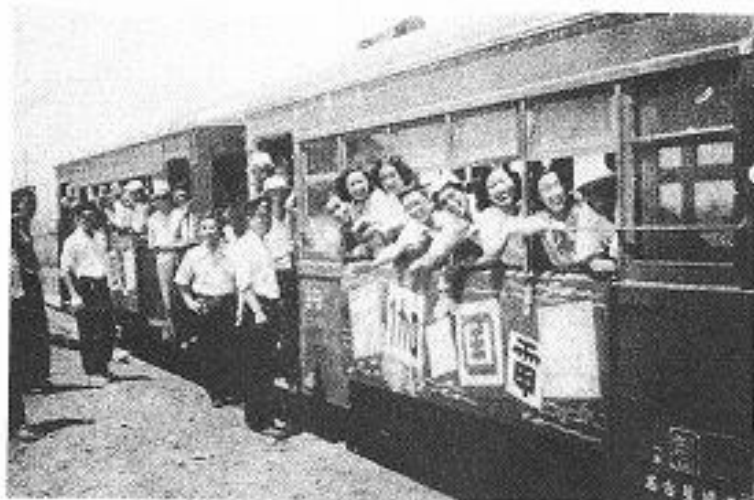
玉津浦はその名に恥じないたいへん美しい海岸であった。夏季には新須磨海水浴場と競い合った様々な誘致策もあって、玉津浦海水浴場にはごった返すほどの客が押し寄せたものである。

この海水浴場は、当時としては珍しい教育活動の歴史を持っている。大正10年(1921)日本赤十字社愛知県支部は県内の身体虚弱・腺病質児童を対象に、児童保養所事業を開始した。夏季、海水浴を中心にして体質改善と健康増進を図ることを目的としたものであった。最初に選ばれたのが、この玉津浦で、大正15年には内海、昭和16年には三谷にも開設されたが、戦後も再開されたのはここ玉津浦だけである。

近くの大浜小学校を自習所兼宿泊所、海水浴場に隣接する大浜熊野大神社を林間保養所として、地元開業医や小学校教員の応援を得て行われた。この事業の開設期間は25日、定員は100人であった。

定員の増減や開設期間に若干の変更はあったが、伊勢湾台風の被害による護岸工事などによって、設置が困難となった昭和39年まで続けられた。この間40年間、祈るような親の思いに送られて、不安と期待を抱いた八千人に近い子供達が、この玉津浦駅に降り立った。





海水浴客を運んだお伽の国電車（碧南市・昭和25年頃）
海水浴客の利便を図るため、玉津浦駅から延びる貨物
用構外側線を利用して電車を走らせた。当時の運賃は
玉津浦—玉津浦海岸間5円であった。（碧南市提供）

5 棚尾広場

(1) 棚尾駅の沿革

大正3年(1914)に刈谷～大浜間に三河鉄道が営業を開始し、引き続き大正15年(1926)大浜～神谷(松木島)間が開通、棚尾駅も開業した。

棚尾駅建設工事 大正15年(1926)7月10日起工

昭和2年(1927)6月19日竣工

駅から源氏までの通称棚尾駅前通りが建設されたのもこの時である。その後、三河鉄道は名古屋鉄道と合併し、名鉄三河線と呼ばれるようになった。この鉄道は貨物輸送が主体であり、どの駅も構内は広い。棚尾駅からは主に甘藷、ニンジン等の農産物や、鋳物、機械製品が出荷された。利用客では毘沙門さんへ参拝者や三栄座への客或いは、地区にあったお医者さんへ来る人が多く語り草になっている。

しかし、自動車時代になり、貨物は昭和35年(1960)に又、旅客は昭和41年(1966)をピークに、利用者も減少し、貨物取扱いも廃止となり駅員も無人になった。そして、平成16年(2004)3月に碧南～吉良吉田間は廃線となり、78年間の歴史に幕を閉じた。

(2) 記念碑3基

棚尾広場の北側遊歩道に、記念碑「初代棚尾橋架橋碑」「掘亀橋碑」「杉村修平懿文徳碑」の3基がある。

(3) 初代棚尾橋架橋碑

矢作川を越すのに昔は渡し舟を利用していたが、明治23年(1890)に村の有志の人達が発起人となって初代棚尾橋を架けた。このため有料橋であったが、建設費用の償却期間終了後に、二代目棚尾橋は県道として建設された。この橋は鉄筋コンクリートで造られ、当時県下の模範橋と云われ、他地区で棚尾の地名を紹介するのに棚尾橋を使うことが多かった。橋はその後も改築を重ね、現在の棚尾橋は4代目である。この架橋碑はこれまで光輪寺にあった。

碑文は次の通りである。

棚尾橋之碑 愛知県知事従四位勲四等 江木千之篆額棚尾新橋長
二百三十六間為矢矧河口之第一橋明治二十一年八月起工至其二十三年三月成焉近邑有志者之所架設也初橋之末架来住皆由舟也人不勝其煩加以道路狭惡風晨雨夕行人艱少其到河津或有不得渡而空返者况河西農民有田於河東者耕運灌溉荷鋤擔畚而渡河其劳果如何哉

棚尾人小笠原六右衛門永井長三郎石川忠四郎齋藤長七石川宗七大濱人角谷半次郎村松文七諸子憂之首唱架橋之議興贊成者三十余人戮力經營遂得以成其事而其道路亦尋見改修今也坦途接長橋人車馳焉馬車走焉老婦女行賈旅客來往者項背相望交通之利日開月之盛無復詵煩與勞者皆諸子之惠也雖然其至於此者豈一朝一夕之業哉初將架橋抗議羣起甚則有論爭於公庁者其起工后十季之間漂流于洪水者之崩壞于地震者一因厄之事不為少而諸子不屈解紛排難遂得有今日可謂勉矣今也永井齋藤角谷三子既逝矣其存者亦將漸老而他日橋之宜修理必有急於今日者於是志者相謀將建碑記其顛末以後之繼其志者囑文于予不文固辭矣

聽乃略叙所聞為之銘銘曰

躡而益振 成功濟民 濟民繼仁 繼仁後人

明治三十一年九月 文学士清沢滿之撰 池田友八郎書

星野守一鐫

(架橋碑正面左下部)

贊成者

碧海郡棚尾村 小笠原源兵衛 鈴木嘉兵衛 小笠原勘六 井上弥七 小笠原和三郎 小笠原曾助 平岩伊平 石川弥七 角谷龜吉 川口金次郎 杉浦十三郎 長田金弥 石川源七 齋藤倉吉 榊原弥十 榊原文三郎 黒田光太郎 杉浦忠造 芝田甚平 三島松平 三島徳平 齋藤弥十 長田清七 小笠原喜一郎 小笠原文右衛門 小笠原助三郎 榊原さち 齋藤富三郎 井上傳兵衛 生田彦十 齋藤広吉 平岩伊助 小笠原松二郎 金原利左衛門 金原梅吉

碧海郡矢作町 岩月藤作

知多郡成岩町 小坂久之助

碧海郡志貴崎村 多田徳助 永坂昇太郎

(訳文)

棚尾新橋は長さ二百三十六間、矢矧川河口之第一橋となす。明治二十一年八月起工し至り其二十三年三月成る。近邑有志者之架設する所なり。

初め橋之いまだ、架せざる往来は皆舟によるなり。人其の煩しさに勝えず、加ふるに道路狭悪を以て風の晨、雨の夕、行人の艱少なからず。其の河津に到る或いは渡

ることを得ずして空しく返る者有り、況や河西の農民、田を河東に有る者、耕運灌漑鋤を荷ない、畚（ふごモッコ）を担ぎ河を渡る。其の労果して如何ぞや。

棚尾の人小笠原六右衛門 永井長三郎 石川忠四郎 斎藤長七 石川宗七 大濱の人角谷半次郎 村松文七の諸子 之を憂いて架橋之議を首唱す。ともに賛成する者三十余人、力をあわせて経営し、遂に以て其の事を成すを得たり。而して其の道路亦尋いで、改修を見る。

今や坦途（広い道）は長橋に接し、人車馳せ馬車走る、老幼婦女の賈旅來客を行う者、項背（うなじと背中）相望み、交通之利日に開け、月に盛なること又煩を説くべし、ともに労する者、皆諸子之恵也、然りといえども、其のまま至れるは 豈一朝夕之業ならんや。

初めに架橋の抗議をもって、群起甚しきは則ち論争の公庁におけるは、其の起工后十年の間、洪水に漂流するは三、地震に崩壊するは一、因厄之事少しとせず、而して諸子屈せず、紛を解き、難を排して、遂に今日有るを得たり。

勉ならんと謂うべし、今や永井、斎藤、角谷の三子既に逝けり、其の存する者も亦將に漸く老いんとす。而他日橋之宣修理すべき、必ず急有るべし、今日に於いて、是に於いて有志者相謀り建碑を將て、其の顛末を記し以て、後の其の志を継ぐ者、文を予に囑す。余は不文にして固辞するも聴いて乃ち聞く所を略叙し之を銘となす、銘に日く。

躓いて益に振り 功成りて民を濟ふ 民を濟ふはこれ仁なり これを後の人に継ぐ

(4) 掘亀橋碑

掘亀橋は蜷川に架かる市道の志貴崎橋の旧名である。この位置の古い字名が掘切下及び亀ヶ下であったので頭文字を取りこの橋名が付けられた。橋が傷んできたので棚尾村の有志によって明治19年（1886）に架け替えられた。

当時は矢作川に橋がなく、西尾への往来は渡し舟によっていたが、この人達が主となって初代棚尾橋が明治23年（1890）に新設された。

碑文は光輪寺住職の高木晃敬が書き、「世のために つくすまことや 匂ふらむ いく萬代も 名残とどめつ」と讃えている。

（表面頭部横書き）

掘亀橋 記念碑

（表面）

むらのひがしに八村川といへる河あり橋いたく朽ち庄三渡

にいたるミちまたあしくて行人いとふやみけるに明治十九
年四月通路のますくに貳拾余間のよきはし架け渡し
名を堀亀橋といふ其東ミちなけれハ土地求め六拾
余間の道つくり地租納めつゝ民世乃ために供へられぬ
そを便りてくるま馬などやすやすと行き来の人乃
よろこびなとたとへんこれなむ小笠原六右衛門永井
長三郎石川忠四郎齋藤長七石川宗七たち有志人
人のたまとの知利茂となさけある美挙といふへし明治
二十七年の冬里道成りてミち編入されはし亦あらためて今
志貴崎橋と称するものこれなり後のためとせよとの
ことに身のほとも忘れかくなむ

世のためにつくすまことや句ふらむ

いく萬代も名残とどめつ

明治三十一年十二月 解脱山僧晃敬識

小笠原竹次郎刻

(5) 杉村修平碑

天保9年(1838年)生まれ、幕末から明治期に活躍した棚尾の医者で文人。藤井達吉も幼い頃教えを受けた。

(表面)

懿文徳 (上部横書)

懿文徳碑 正二位勲一等伯爵 東久世通禧篆額

孟子得天下英才而教育之為君子三樂之一況仰不愧於俯不忤於人
如豊臺杉邨翁亦最大矣乎翁名財字公成通称修平三河碧海郡棚尾
村人考曰弥四郎鬻葉為業以天保九年戊戌十二月生翁幼而機敏常
好讀書師僧秀階受句讀学書法三宅洪庵年甫十九奮然立志至名古
屋入奥田大觀之門研究經史又就麻生白處修蘭学更從柳田良平專
学医術淬磨砥礪留為十季学成歸郷則以医開業傍講聖賢之学授徒
名声籍甚屐滿門無幾應菊間藩侯召為二等医偶々明治革新之際生
徒益多及数百人於是教育愈務將爐冶英才補翼国運日夜黽勉誘導
亦至矣今也齡躋古稀其徒相謀欲刻石以衆多年薰陶之恩遠寄状問
余余乃託之併作頌曰

資性温厚 古謙古約 藹藹杏林 芬馥發萼
豈啻刀奎 將民瘼鑿 追聖慕賢 育英是樂
年及杖国 身益矍鑠 吟詩啜茶 餘裕綽綽
噫此寒鄉 始振木鐸 顯晦任命 獨全天爵

明治四十年秋九月 鴻齋居士 石川英 撰
池田友八郎 書

(裏面)

門人建之

岡崎町 杉浦権太郎
石工 刻字 奥瀬兼吉
羽佐田徳太郎

(訳文)

懿文徳碑 正二位勲一等伯爵 東久世通禧篆額

孟子天下の英才を得て之を教育するは君子の三樂の一つと為す。況や仰いでは天に愧じず、俯しては人に忤じざるをや。豊臺の杉邸翁の如きは亦最も大なるかな。

翁の名は財、字は公成、通称は修平なり。三河碧海郡棚尾村人考に曰く弥四郎薬を鬻ぎて業と為し、以って天保九年戊戌十二月生まれなり。翁幼くして機敏、常に読書を好み、僧秀階を師として句読受け、三宅洪庵に書法を学ぶ。

十九の年の甫奮然として志を立て、名古屋に至り、奥田大観の門に入り、経史を研究し、又、麻生白處に就いて蘭学を修め、更に柳田良平に従いて専ら医術を学ぶ。淬磨砥礪留りて十季と為す。

学成りて帰郷し、則医を以って開業し、傍ら聖賢の学を講じ、徒に授く。名声籍甚履門に満つ。幾ど菊間藩に應ずる無し。藩侯召して二等医と為す。偶々明治革新の際に当たり、生徒益々多く数百人に及ぶ。是に於いて教育し愈々務めて將に英才を爐冶し国運を補翼せんとす。日夜黽勉誘導して亦至れり。

今や齡躋りて古稀なり。其の徒、相謀り以って衆多年の薫陶の恩を石に刻せんと欲す。遠きは状を寄せ余に問ふ。余乃ち之に託して併せて頌を作りて曰く。

資性温厚 古謙古約 藹藹たる杏林 芬馥として萼を發す

豈にただ 將に民瘼を鑿せんとす 聖を追ひ賢を慕い 育英は樂し

年杖国に及べども 身益す矍鑠 詩を吟じ茶を啜り 餘裕綽綽

噫此の寒郷 始めて木鐸を振ひ 顕晦命けんかいに任せ 獨り天爵を全うす
明治四十年秋九月

鴻齋居士 石川英 撰
池田友八郎 書

6 三河旭駅広場

三河旭駅周辺は昔、海であったが、矢作川の砂によってこの地に平七新田ができた。現在の平七町、志貴崎町、川端町及び雨池町が平七新田の区域である。この新田は碧南の矢作川に面した新田の中では最初に造成された新田である。

これらの地域は矢作川が開削される慶長 10 年（1605）までは海であったが矢作川を流れる大量の土砂で砂州が出来るようになった。東浦に住んでいた稻生平七郎は、開拓を志しこの砂州を測量して、同 3 年（1654）に小範囲の地を得て試作した。その成績がよかったので、翌明暦元年（1655）から本格的な計画を立てて調査嘆願、金策にとりかかったという。

開発は稻生平七郎、林勘兵衛、間瀬弥左衛門、大脇六右衛門の 4 人が、領主である西尾城主の許しを得て行い、7 ヶ年は作取り御免（無税）の期間があつて、寛文 3 年（1663）に新田が完成した。13 軒が棚尾村から入居し、北部に神明社を祀った。翌 4 年に検地が行われ、長さ 800 間の堤防で囲まれた 18 町 3 反 7 畝余の田畑、190 石 8 斗余りの石高の平七新田が幕領となった。

検地当時、新田の半分ほどは水が深くて作付けができなかった。年貢は 2 割 2 分と決められた。その後、西尾領や岡崎領、幕領などの変遷を繰り返した後に沼津領として幕末を迎え、明治 7 年に平七村に属した。

棚尾と平七の境界である境橋の北に稻生社が建てられ、境内に平七新田開墾の功績者である稻生平七郎の顕彰碑が建っている。